

7. 肉眼的血尿、左背部痛および膀胱浮腫に対し、当帰芍薬散が著効した1例

高木病院
○宮原 誠、西井 貴誠

【症例】40歳女性。

【主訴】左側背部痛、肉眼的血尿。

【既往歴】特記すること無し。

【現病歴】検診で左胸水を指摘され当院内科に入院し、胸腔穿刺など精査を行った。内科的には結核性の胸膜炎による胸水と診断し、抗結核薬の内服治療を開始した。入院中に肉眼的血尿および左側腹部痛を訴え、泌尿器科受診した。血液生化学検査、尿細胞診、尿培養、超音波、CT、DIP、MRI施行するも血尿以外の異常所見無く、止血剤内服にて外来経過観察となった。

【経過】外来にても血尿、左側腹部痛が間欠的に起こるため、膀胱鏡検査施行したところ、左尿管口周囲に著明な浮腫を認めた。また、外来でのMRIでは腫瘍性病変は認めず、膀胱及び左下部尿管に浮腫を認めた。悪性腫瘍の可能性を否定できない旨を本人に説明し、膀胱生検と尿管鏡検査を勧めるも同意を得られず、施行できなかった。その後抗生剤や止血剤、利尿剤による治療を試みるも改善無く、東洋医学的治療に変更した。やせ型、虚証であることと軽度の瘀血の所見から当帰芍薬散を処方したところ約1ヶ月後に肉眼的血尿および左側腹部痛が改善、尿沈渣でも正常となった。本人の希望で内服を続行、4ヶ月後に再度膀胱鏡を施行したところ、膀胱の浮腫は改善していた。

【考察】肉眼的血尿と疼痛は結石や悪性腫瘍を疑わせる症状であり、積極的に内視鏡検査を勧めるべきと考えたが、各種画像や細胞検査にて異常を認めなかったことと本人の強い希望により東洋医学的治療に切り替えたことが良い結果となった。その後4年内服続行しているが症状は落ち着いており、画像上も悪化が無いことから悪性腫瘍は否定的である。瘀血による骨盤内鬱血が血尿・浮腫という形で症状を呈したと考えられる。そのため当帰芍薬散が著効したのではないかと。文献上妊婦の血尿に当帰芍薬散が著効した報告もあり、若干の文献的考察を添えて報告する。

8. 柴苓湯とJJステントで長期経過観察している後腹膜線維症の1例

みなと医療生活協同組合 協立総合病院 泌尿器科
○日比 初紀、大堀 賢

尿管閉塞に対する尿管ステント留置は広く行われている治療であるが、尿管閉塞の原因が取りのぞかれない限り持続的な留置が必要である。一般的に3ヶ月程度を目安にステント交換・再留置される事が多い。今回後腹膜線維症による両側水腎に対してステント留置と柴苓湯で長期経過観察している症例を報告する。

症例 75歳男性、主訴腎不全。CTで両側水腎、右腎実質は高度菲薄化していた。左尿管にJJステント留置し、柴苓湯とクレメジンを投与した。一旦Cr=2.5まで低下したが徐々に上昇したためステントの閉塞も考え3ヶ月毎の交換を行っていた。しかし交換後も腎機能は軽快せず、ついには腹膜透析導入となった。交換の際、ステントの汚れも殆どない事を確認していた。USで水腎がなければ交換時期をどんどん遅らせ、最長で10ヶ月同一ステントを留置したが閉塞、発熱などのイベントは認めず、6年以上経過観察している。

柴苓湯は柴胡剤としての抗炎症効果と利尿効果を有している。本症例では残念ながら後腹膜線維症による腎障害の進行を食い止めることは出来ず腹膜透析導入された。しかし尿量の確保、ステント交換を6-10ヶ月に延長できた事は、交換にかかる本人の負担を考えると意味のあることと思われる。今後ステント閉塞をしばしば起こす症例に電解質に注意しつつ柴苓湯を使用していきたいと考えている。